

音水国有林植物採集記

杉 田 隆 三

昭和40年8月20・21・22日の3日間、本学会の夏期研修講座の一つとして宍粟郡波賀町音水国有林で植物採集会が開かれた。参加者54名。県下第一の原始林であり北方要素・日本海要素の入りこんだ植物相をもつこの地に、講師として京都大学より田川基二・岩槻邦男両先生を迎え、さらに会員の室井緯・稲田又男の両氏もわずらわし懇切な指導を受けることができ実に収穫の多い採集会であった。以下その大要を記すがシダ植物については稲田氏が別に執筆されているので省略する。なお奥谷国有林概説および文献については本誌第4巻5号の岩谷成彦氏の記事を参照されたい。

第1日(8月20日)

一同は午前9時5分貸切バスで姫路駅前を出発、完全に整備された国道29号線を快適にドライブし9時50分頃山崎につく。ここで15分程停車、再び国道を音水に向う。曲里をすぎた頃より路は悪くなりはじめ、原をすぎると改修工事の最中で全くの悪路、車は左右に大きくゆれ棚からリュックが落ちてくる始末で車の速度も上らない。11時頃音水口に到着。徒歩で左下の引原川の方へ下り、橋を渡って爪先上りの道を進み宿舎となる民家につく。まもなく我々の歩いた道の右側に奥音水までのトラック道路がつくそうである。

昼食後1時より中音水に向け出発。宿舎をでると早速採集がはじまる。附近の石垣にはオノマンネングサ・トラノオシダが着生しており、谷川にはメタカラコウがある。少し進むと山崎営林署音水事業所があり、赤西と中音水より来た森林用軌道がこの前で合流している。我々は上手の橋を渡り中音水に通ずる軌道上を進む。橋のあたりにはフサザクラ・サワグルミ・ウラジロガンなどの大木がある。

軌道は何回か左右に屈曲し、やがて大きく右に曲ると眼下に中音水の谷川があらわれてくる。ここで室井氏がナツエビネの花の咲いているのを一株発見、頭上の樹木を観察していた岩谷氏が大いに残念がる。橋よりここまでの間にウラジロガン・フサザクラ・キブシ・フジキ・サワシバ・ウリノキ・リュウブ・ケンボナシ・ツクバネガン・オオバアサガラ・ミヤマハハソ・カナクギノキ・エンコウカエデなどの樹木があり、その下にはネマガリダケ・フシグロセンノウ・クサアジサイ・ミヤマイラクサが多く、カブトゴケが1カ所だけみられた。これから先

は杉の植林地が軌道の両側につづき見るべきものもあまりないうえに日光の直射をうけて汗をかくばかりなので途中から谷川に降りる細い道をつつけて谷川に降りる。1.5km程歩いただろうか。この間でキハダ・シオジ・ナナカマド・エゴノキ・イヌブナ・ニガキ・ミツバウツギを採る。谷川で小休止。皆が休んでいる間に高砂中学の内藤氏が附近で一株のツチアケビを採集してくる。おそらく本日の最良の収穫物だろう。

休息後、谷川ぞいに赤西に通ずる軌道まで下り、それから軌道上を歩いて午後4時宿舎に帰りつく。谷川ぞいにはコヒルガオ・テンニンソウ・フシグロセンノウ・コウヤノマンネングサ・オオバタイセイ・オオツツラフジ・ノリウツギ・タムシバ・アカシデ・シタキツルウメモドキ・カラスザンショウ・サワフタギ・エゾエノキ・ハナイカダ・ユクノキなどがあつた。

宿舎につくと早速庭で採集物の整理をはじめ、採集物の名称のわからないものは講師の先生方に教えていただく。

夕食後自己紹介あり。田川先生からは昭和23年夏、赤西・中音水に採集にこられ、クラガリシダを採り、人の背丈をはるかにこすオニヒカゲワラビをみつけ、その大きなことを示すため短身の建部氏がこれをもって写真をとったこと、帰路には材木運搬用のトロッコにニワトリと一緒に乗って下りたこと(この時は室井・稲田・建部・藤本の各氏と筆者がお供をし、写真は筆者がとったと記憶している)また昭和28年には雪彦山でナチンダ・イヨクジャクを発見されたことなどの話があり、室井氏からは17・8才頃建部氏と採集に来ていろいろと苦労された話や、竹を1〜2節ほど使う時には上下を逆に使い、茶杓をつくる時も勿論逆竹にして柄は芽のでる側につけるのだというような話があり、他の参加者からもそれぞれ楽しい紹介があつた。

第2日(8月21日)

起床6時、朝食6時半。7時すぎ奥音水にむけ出発。営林署の建物の前より右に折れ、民家の横の細い道を通り谷川の左岸にそって進む。イラクサが多い。橋を渡り右岸を行くと、チドリノキ・フサザクラ・コバノクロウメモドキ・ニガキ・テンニンソウ・ザゼンソウ・ヤマブドウなどがある。再び橋をわたり左岸を進むと杉の中にカツラ・クリ・ミズキ・チドリノキ・キハダ・ケイタヤ

カエデなどの樹木があり、その下にはヒカゲミツバ・ヒナノウスツボ・ヤマアイ・ミカエリソウ・ギンバイソウ・ヤマハタザオなどがでてくる。

やがて視界が大きく開けこの谷の水を原引ダムに送る取水口にでる。この辺にはイラクサが多く、ミツバフクロウ・コフクロウ・キツリフネもある。

さらに谷川の左岸を進む。このあたりからは全くの原始林となり樹木はよく繁り、谷川の清らかな水は大小様々な岩の間を流れて行く。シオジ・トチノキ・オオバクロモジ・フサザクラ・ハクウンボク・ウラジロガシ・イロハカエデ・ハウチハカエデ・アワブキ・ゴマキ・アサクラザンショウ・ブナ・ミズナラなどの樹木がある。今年の高校野球に使うバットの原木はこのシオジがきりだされたのだと建部氏より説明あり。樹下にはサカゲイノデ・オシダなどの大きなシダが生育し、ウバユリ・フジカンゾウ・ボタンネコノメ・サイハイラン・オニルリソウ・トチバニンジン・スミレサイシンなどもある。また無性芽をつけたホソバノトウゲシバやツメゴケもあった。室井氏に教えられるまで無性芽であることがわからなかった。

9時20分、出発点より約1.5kmの地点の谷川で休む。この辺からオクノカンスゲが多くなり、リュウメンシダ・ツクパネソウ・アズマガヤ・コタニワタリもあり、岩にはイワタバコ・ジンジソウ・チャルメルソウなどが沢山に着生し、アカウラカワイワタケも採集された。

これより谷を渡り右岸を上ると大きな岩が頭上にせまり15度ほどにオーパングした所にて。この岩に氷河期以前の生き残り植物と考えられるエビゴケの群落が見られ、またウチハチュウチンゴケ・イワデンダ・ホソバハイホラゴケ・コウヤコケシノブも一面に着生している。急な崖道を上って行くとミヤマベニシダの見事な群落があり、その手前にはヤブソテツ・イワウチワが多い。

ミヤマベニシダの大群落を見た時には皆思わず喚声をもらす。ミヤマベニシダを存分に採集した後、同じ道を崖下まで引き返し「双竜の滝」の音を足下にききながら谷をわたり左岸に出る。これより道は谷川とはなれ、また谷川の横にで、ふたたび谷よりはなれ、やがてまた谷川にでてくる。この間にはモミ・ブナ・カツラ・イヌブナ・ミズナラ・ウラジロガシ・トチノキ・チドリノキ・アサノハカエデ・イタヤカエデ・ヒメウチハカエデ・ウリカエデ・ヤマモミジ・シオジ・天然杉の大木があり、樹下にはハイヌガヤ・オクノカンスゲ・タイミンガサ・モミジガサ・コタニワタリ・ミヤコイヌワラビ・ハスノハイチゴ・ヤマジャクヤク・ヤグルマソウ・エンレイソウ・ザゼンソウ・フタリシズカなどが見られた。途中から藤岡氏・杉山氏が追いついてこれれ杉山氏特有の洒

落でにぎやかになる。

谷を渡り右岸を進むとトチノキ・サワグルミ・イタヤカエデ・コハウチワカエデ・ハリギリなどの下にツリフネソウ・アキチュウジ・オオルリソウ・オオキヌタソウ・ヤマジャクヤク・モミジガサ・ムロオテンナンショウ・ヒナノウスツボがでてくる。

11時45分、本隊は谷をこえた少し奥で、しんがりの一隊は谷川のはとりで昼食をとる。本隊の昼食した場所より少し奥でクラガリシダ・ホテイシダが採集された。

昼食後は谷川の右上の道までユリワサビの沢山ある傾面をよじのぼり、この道を通って最初に休んだ場所に下り、それから往路と同じ道を通って帰ったが、岩谷・谷口・内藤・安平の4氏は、昼食した場所よりさらに奥へ3時頃まで上って行き、宿舎に帰って来たのは日暮間近であった。なおこの4氏によりサトメシダ・モミジハグマ・ツリシュスラン・サトメシダ・イワハリガネワラビ・クモギリソウ・ホテイシダ・ルイヨウボタン、サワグルミとコハクウンボクの実のついたものなどが採集されてきた。このうちサトメシダ・ホテイシダ・イワハリガネワラビは岩谷氏の採られたものである。

夕食後、京大法学部学生の平安君が撮った尾瀬のカラーライドを見せてもらう。尾瀬のライドは何人かの人に見せてもらったが、まだ一度も行ったことがないのが残念である。夕方雨がばらついたので明日の天候を心配しながら床につく。

第3日(8月22日)

6時起床、6時半朝食、心配していた天気も快晴である。直ちに荷物を整理し、前日までの採集物や不用の荷物は音水口まで運び、中原氏の厚意により小型トラックで原まで運んでいただき身軽なでたちで出発。原まで引原川の右岸にそった森林用軌道上を歩いており。日陰のない暑い道である。途中でキヨスミサガリゴケ・ハルニレ・イヌザクラ・シオデ・ウシキタソウ・ナンパンハコベ・オオアブラススキなどをとる。原より道を西にとり広い道を約1.5km歩き「不動の滝」登山口につく。ここで一休みしミツパカエデの実の沢山あるのを採る。滝への細い登山路を入ると小さいお堂がある。その上の方でオオクジャクシダ・クロタキカズラをとる。これより道は急になり滝の手前ではさらに急になり、岩肌を鎖をたよりによじ登る。途中にはウラジロガシ・イロハモミジ・リュウブ・コバノトネリコ・ナナカマド・イヌブナ・ウリノキ・クロモジ・トチノキ・アカンデ・コンテリウツギ・ヒカゲツツジなどがあつた。道を上り切ると滝の音が聞えはじめ溪谷に向かって降りて行くと雄大な「不動の滝」が中天より落下している下にでる。実に見事な滝である。あたりの岩にはイワタバコ・チャルメルソウ
(以下、p. 179へ)

(以下、p. 168より)

ウ・ウワバミソウ・ダイモンジソウなが着ど生しており山の傾面にはシラキ・トチノキ・ヨグソミネバリ・アカシデ・クロモジ・モミ等の下にハイヌガヤ・キッコウハグマ・ミヤマカタバミ・ホソバトウゲシバ・オオバインモトソウ・ニシノヤマクワガタ・イワウチワ・ヒロハチョウチンゴケなどが生育している。また倒木や樹上からはヨウラクラン・ムギラン・カヤランが採集された。しかし特筆すべきは内海氏によりエビゴケ・スギラン・モミランが発見されたことであり、スギラン・モミランは県下でははじめての採集であるとのことであり、本採集会の終りを飾るにふさわしいものであった。またナツエビネの一株も内海氏により採集された。

10時半頃滝を出発し同じ道を下り、オオフジシダをとった場所の少し奥でフジシダをとる。原の引原川のほとりで昼食をとり、12時半貸切バスに乗車帰路につく。途中、播磨一の宮の伊和神社に参拝その社叢をみる。2時頃姫路駅到着。無事採集会も終り各自は獲物で重くなったリュックを背に家路へと急ぐ。

筆をおくにあたり、ご指導をいただいた田川・岩槻両先生、多人数の入山を許可下さった営林署、準備に奔走された藤本義昭氏、地元での連絡や荷物の運搬にあたって下さった中原哲男氏、宿舎や食事の世話をして下さい

た民家の方々に対し深く感謝致します。なお、この記をかくにあたり岩谷氏より多大の助言をいただいたことを付記しておきます。

ミカズキグサの自生地について

本年加印支部主催の標本鑑定会に運びこまれた小学生の標本中に1本のミカズキグサを室井緯氏が発見、採集地を聞き9月4日にその場所に行って沢山あることを確認しました。場所は加古川市上荘町小野で、神姫バス上荘線に乗り小野で下車、田の中の道を北に行くと同麓に数軒の民家があり、路は行きどまりとなります。それより畦を左に山麓にそって行き右に曲って小溝にそって行くと25,000分の1の地図上の「長池」の下の小さい池のほとりにでます。その池の北側の傾面の広い湿地が自生地です。そこにはモウセンゴケ・コモウセンゴケ・インモチソウ・ミミカキグサ・ホザキノミミカキグサ・サギソウも見事に生えており、沼地にはミズギボウシもあり大変面白い場所です。

なお、ミカズキグサは氷河期の残存植物であり、保育社の原色日本植物図鑑によれば「日あたりのよい高原の水湿地に生える多年草：分布は九州・本州（主として中部地方以北の高山）・北海道」となっています。

(40.9.14 杉田記)